

理趣経

こんにちは、斎藤友蔵と申します。

本日は逆境に学ぶについてお話させていただきます。

彼岸へわたるのに、最も障害になるのが私たちのもっている我欲、我執、すなわち煩悩です。

ところが半面、この煩悩は、私たち人間の生きるためのエネルギーでもあるのです。

真言宗の「理趣経」には、

「菩薩は、衆生を救うために、最後まで人間的迷いのすがたを現すものであり、これこそ如来が衆生を救わんとするすぐれた智慧の働きである」と説かれています。

私たちは、自らの力で我執を断つことは容易ではありませんが、より強力な他人の我、あるいは大いなる作用『逆境』にぶつかったとき、それを断たざるをえない心になります。私たちの我執を断ってくれるのは、ほかならない他人の煩悩であり、逆境ということになるでしょう。

簡単に今の言葉で言えば、「人の振り見て我が振り直せ」と言えましょうか。

他人の迷いの姿は、実は、愚かな私を救済するために、身をもって悪役を演じて下さった菩薩様なのです。

他人の逆境に学び、自分が理想とする「もう一人の自分」に気付いて、しかも共に泣き、笑い、苦しみ、悩み、そして喜ぶ、この人生において他に彼岸はないのです。

彼岸とは、こだわりのない理想の世界、覚りの世界です。

善人と悪人の、逆説的なお話をもう一つ致します。

悪人正機説と言われる、「歎異抄」の中で語られている、親鸞の最も有名な言葉があります。

「善人なをもて往生をとぐ いはんは悪人をや」です。

「善人が往生できるのなら、悪人が往生できるのはあたりまえなんだ」ということです。

普通は、その反対の

「悪人が往生できるのであれば、善人が往生できるのはあたりまえ」となりますね。

だからこれは宗教的パラドックス、逆説だとされています。

悪人こそまさしく仏さまに救われる対象である、というのは一体どういうことでしょうか。

じつはこれは物差しの問題です。

世間の物差しによるか、仏のものさしによるか、で考え方が違ってくるのです。

われわれ人間に分かるのは相対的な善悪、世間の物差しによる善悪ですからころころ変わります。

ところで仏のものさしは、私たちには分かりようがありません。

そこはこだわりのない理想の世界であり、覚りの世界なのですから、いってみなければ分かりません。

それよりも、もし悪人が自分より先に往生したら、彼岸にいったとしたらあなたはごどう思いますか？そのときこそ、あなたの心が試される時かもしれません。

悪人が彼岸へ行くのを見て、もしあなたがともに喜んであげられるとするならば、きっとあなたも彼岸に行くことができるでしょう。

他人の煩悩をみるとき、またあなたが逆境にあるとき、それは一番の試練であると同時に、大きな救いのときかもしれません。